

# ニセコリンリンファーム 鈴木登さんが築いた 「牛が主役」 の牧場



## リンリンファームの歩み

「リンリンファーム」という名は、創業者である鈴木さんの名字「鈴」（鈴の音）に由来しています。

令和3年、鈴木さんは荒地から牛の飼育をスタートし、最初に5頭の牛を迎えました。それから3年が経ち、現在では10頭の牛がこの牧場で元気に暮らしています。

牧場経営は決して簡単なものではありません。牧場を始めるには、最低でも5千万円、時には一億もの資金が必要です。鈴木さんが牧場を始めたのは38歳の時でした。膨大な返済のことを考えると、本当にこの形でやっていけるのか、彼は迷いましたが、妻である塁さんの理解を得て、8ヶ月をかけて事業計画書を完成させました。

牧場の設備には中古の機械を活用し、コストを極力抑えながら運営してきました。周囲からも当初は大反対を受けましたが、鈴木さんは成果を挙げることで、徐々に周りを説得していきました。そして、今は牛乳の加工販売を見据えた計画も練っています。

鈴木さんの牧場では、北海道では珍しいパイプハウス牛舎を取り入れ、冬でも暖かい仕組みになっています。現在、鈴木さんは仕入れたチーズを加工してクリスピーチーズを作っています。将来的には、自分の牧場で生産した牛乳を使いたいと考えています。

## 鈴木さんの牧場哲学

鈴木さんの牧場運営の哲学は、牛を第一に考えることです。それぞれの牛に名前を付け、特徴に基づいて寝る場所を



ご飯中のマークちゃん

決めるなど、個別のケアを行っています。鈴木さんは牛主体の飼育を徹底しており、牛乳の量をあえて減らしてでも牛にストレスを与えないよう心掛けています。その結果、牛乳の質は向上し、牛の健康が第一に保たれています。

鈴木さんの牧場では、牛が病気にならないよう細心の注意が払われており、経済的な利益よりも牛の健康が最優先です。牛は元々臆病な性質を持つはずの動物ですが、リンリンファームの牛は人を怖がらない、それは鈴木さんとの信頼関係がしつかり築かれている証拠です。

「牛がいるからこそ生活ができる」という鈴木さんの言葉には、彼の感謝の気持ちが込められています。彼は放牧酪農を実践し、牛の顔や目、耳を見るだけでその健康状態がすぐに分かるほどの愛情を注いでいます。

ロボット化された酪農ではなく、一頭一頭をしっかりと世話することが、鈴木さんにとっての牧場経営の本質です。鈴木さんは、牛たちの健康状態や気持ちに寄り添い、日々の世話を通じて彼らとの信頼関係を築くことを大切にしています。



羊蹄山を一望できるリンリンファーム  
と鈴木さんご夫婦

## 「お金より経験だ」

ニセコに移住する前、「お金より経験だ」を人生信条とする鈴木さんは、東京を出発し、屋久島の縄文杉をゴールに日本中を旅していました。旅の途中でニセコに立ち寄り、高橋牧場で短期間働いた際に、罌さんと出会いました。旅を再開するつもりでしたが、罌さんとの出会いによりその計画は一時停止。

その後、鈴木さんは高橋牧場で14年間酪農を学び、その後自分の牧場を持つことを決意しました。鈴木さんにとって酪農の仕事は、運命的な出会いでした。

幼稚園の卒業アルバムには、幼児の鈴木さんが搾乳している写真があり、まるで酪農が自分の運命であったかのように感じています。現在は、自分の仕事に対して強い適性を感じており、子供たちが成長する中で、自分たちの仕事に共感してくれる日が来ることを願っています。

## クリス・ピーチーズと牧場

鈴木さんご夫婦がクリス・ピーチーズの製造を始めたきっかけは、隣町の酪農家からの紹介で出会った食品機械を譲ってくれた関さんとの縁でした。牧場の未来を考えると、リンリンファームの知名度を高めることが重要だと考え、罌さんが即決で取り組むことを決めました。

これを皮切りに、鈴木さんご夫婦は、リンリンファームの牛乳を使用したヨーグルトやソフトクリームの製造にも取り

組む予定です。また、自分の店舗を持たず、他店舗に自社製品を置いてもらうことで、牧場の仕事を中心に展開する予定です。



冬でも暖かいパイプハウス牛舎

鈴木さんご夫婦は修学旅行生が牧場を訪れた際、学生さんたちに搾乳体験をさせることができました。彼らは子供たちの活気に感動し、親目線で学生たちと接しました。また、鈴木さんご夫婦はインスタグラムなどを活用して、牧場の知名度を少しずつ上げています。

## 酪農の挑戦と苦労

酪農の仕事で一番苦労したのは、牛を妊娠させることでした。酪農には独特のサイクルがあり、子牛を産んだ後も10ヶ月間牛乳を出し続け、その間に再び妊娠させる必要があります。

しかし、牛が妊娠する際には、通常の状態よりも大幅に多くのエネルギーが必要となります。そのため、牧場で育てた草だけでは十分なエネルギーを供給することができません。



黒い円筒形にラッピングされた飼料

牛が食べている飼料は海外から輸入しているため、円安やコロナ禍での供給問題は大きな課題になり、経営に悪影響を及ぼすケースも少なくありません。鈴木さんは、価格転嫁ができるようなビジネスモデルを模索しています。

墨さんにとって特に印象深いのは、初めて牧場で生まれた子牛を市場に出すときのことでした。子牛をトラックに積む

とき、まるで自分の子供を送り出すような感情が込み上げ、涙が出たそうです。こうした経験を通じて、墨さんは牧場経営の厳しさと向き合っています。

## 牧場と家族のつながり

今、鈴木さんはリンリンファームで心豊かな生活を送っています。収入は決して多くはありませんが、日々の仕事に楽しさを感じています。牧場での仕事は、もはや生活の一部となっており、経営の厳しさを感じつつも、牛との時間を大切にしながら日々を過ごしています。

鈴木さんは、墨さんと子供たちが自由に生活できるように配慮し、旅行に行かせています。牧場の仕事の中で鈴木さんご夫婦の意見が衝突することはほとんどありませんでした。墨さんはクリスマスピチーズ作りを担当し、鈴木さんは牧場の



道の駅「ニセコビュープラザ」で販売されているクリスピーチーズ

管理を担当するなど、それぞれの役割を分担しながら協力して生活を支えています。子供に牧場を無理に継がせるのではなく、自由に選ばせたいというのは、鈴木さんの親心から来るものです。

## 未来と希望

ニセコ地域の手厚い子育て支援のおかげで、子育てに関しては大きな苦労はないものの、年頃の子供たちの反応に親心

が揺れることもありますと墨さんが話してくれました。ニセコは、日本でも人気のある観光地であり、特に冬には世界中からスキーを楽しむために訪れる観光客が多いことから、国際的な環境が整っています。このような環境の中で、ニセコに移住することを考える人も増えるでしょう。

鈴木さんは、農家としての価値、牧場としての価値、そして牛乳の価値を高めることを目指し、消費者が選ぶことで、牛乳の価値が高まり、お互いが支え合える未来を作りたいという強い思いを抱いています。

そして、近い将来、鈴木さんの一時停止した屋久島の縄文杉をゴールとする旅行は必ず再開できるでしょう。

(聞き手 北海道大学文学院博士後期課程 凌玲)